

[書評] 玉田勝郎著 『子ども認識の分水嶺』

著者	小川 正
雑誌名	教育科学セミナー
巻	21
ページ	18-19
発行年	1989-12-15
URL	http://hdl.handle.net/10112/00019494

玉田勝郎 著

『子ども認識の分水嶺』

明治図書(1989. 3)

玉田勝郎教授は、私にとって、「気になる」教育学者である。「気になる」という意味は、どちらかといえば、教授が「社会存在としての人間」観のもとに子どもの認識発達を中核として教育学の構築に勤しまれ、私が「『個』的存在としての人間」観（いわれるところの児童中心主義者・自然成長論者ではない。教育実践の前進のためには教育の諸々の要件・営為を「人間の世界」のなかで表現するよう努力すべきではないかと考えているにすぎない）のもとに、同じ課題を追究し、立場は異なるけれど、いままです教授の研究成果から学ぶものが多くあったからという意味である。今回上梓された労作『子ども認識の分水嶺』もその例外ではない。

本書は、マルクス主義の立場から子どもの意識と思考の発生と発達に関して究明をすすめ、ヘーゲルの『精神現象学』に優るとも劣らない業績を残したH・ワロンの研究成果を主素材としながら、教授が「子どもにとって表現とはなにか」を問い、私たちが子ども認識をいかにすべきか、新たな視座を問題提起された労作である。

本書の基本的モチーフは、ピアジェ学派が子どもの生活世界の手前まで迫りながら、子どもという存在者と出会うことなく、抽象的な近代認識論の〈主-客〉の観察者の視線（教授はそれを「管理社会の支配的な視線」といわれる）へまいもどってしまったのに対して、ワロンの考察は発達学の脱構築への契機を秘めたものであったと、ワロンに学び、しかしワロンにとどまることなく、さらにワロンを超えようとされ

たところにある。（たとえば、ワロンは「知的行為の不全性」を結局“近代西欧の文明化した成人”の知的行為をモデルとして、そこからの落差・逸脱を測定する主知主義的分析に墮していることを指摘し、それを克服しようとされている）

内容構成をかたんに紹介しておけば、序章学校知の基層に横たわるもの、1章ピアジェ学派の空虚、2章最初の共同性、3章鏡の中の身体像、4章まねびの発生と構造、5章泣く、6章あそびの弁証法、7章失語症の世界、8章言葉の制度化と表現行為、補章子どもにおける〈喩〉の発生、である。

序章と1章でさきのような基本的モチーフが述べられ、2章から4章まではワロンの業績の紹介が主であるが、それは心理学者や教育学者の既存の解説に頼ることなく、子どもの表現行為の諸相をめぐって、教授独自の解釈がほどこされている。5章以降は、ワロンに学びながら、ワロンを超えるべく、メルロ＝ポンティ・柳田国男・ホイジンガ・ゴールドシュタイン・時枝誠記・レオンダー等々、周知のごとき教授の博学な知識を駆使して論究がすすめられている。とりわけ、8章と補章が、関西大学へ赴任されてからというだけでなく、湊川という現場の教育実践を体験されてからの研究成果として、「根本的な事実」（時枝）や隠喩の重要性の指摘は興味深かった。しかしそこには、7章までの論究と微妙な（私の観点からいえば飛躍的な）ズレがある。たとえば、近代科学を超えるといってしまうえばそれまでであるが、「科学」

に対する教授の考え方も変化しているのではないか。私は発展の可能性を秘めたズレと評価したい。以下、私が本書から学んだ点を焦点化して述べることにする。

玉田教授は、教育学の近代主義止揚の分水嶺が、人間能力の成長・発達を「自然成長主義」的に追認するか、それとも共同主体的な形成しあう実践の関連として主体的協働的にとらえるかにあるとし、そのさらなる克服を後者の立場に立ちながら、子どもの生活世界にまで入り込んで明らかにされようとしている。そのさいまず、子どもの「逸脱的な表現」をことのほか大切にされる教授のやさしさに深く感動するのであるが、その課題究明の基本的観点はワロンから学びとった「情動」と「象徴」の機能・役割の追究にあると思われる。前者に関しては「志向関係」成立の地盤にある「根本的な事実」、意外性に富んだ未知な新たな回路としての「地下道」（谷川）、後者に関しては常識的な把握をゆさぶり活性化させる「隠喩」等の考察は、「表現」を通しての子ども認識の新たな視座を提供するものとして私たちに豊かな示唆を与えてくれる。

ただ私が、玉田教授の研究成果にどうしても違和感を感じざるをえないことは、脱構築を強

調されても、「近代の虚無」への対決というか、たとえば、ジャック・デリダや上田薫教授のように、近代の哲学が前提にしている「世界は客観的に存在し、合理的認識をもってすれば、両者は一致する」という思惟のパラダイム自体までは否定されていないようである。その結果、教授の論究は客観的世界における一般性を求めたのそれであり、研究成果から個々の子どものトータルな生きた姿は浮び上がりにくい。教育実践の前進にとって必要なのは、その子にかなる指導をほどこすかであって、一般的な手がかりを示唆するだけでは不十分であろう。（子どもの作文・詩の引用にさしても、同一の子どもの時間的空間的に異なる場面の三つ以上のそれに関連づけ、そこに現われた変容を全体的かつ立体的に解釈できるような引用の仕方をすべきでないか。子どもの生きた姿は唯一の引用ではみえない。もっといえば、玉田教授には、自己意識 — 自己認識ではない — を究明する問題意識があるであろうか）

いずれにせよ、近代主義的な通念に埋没しがちな私たちの視野を拓けてくれる好著であり、会員諸兄姉に一読をお薦めしたい労作である。

（小川 正）